

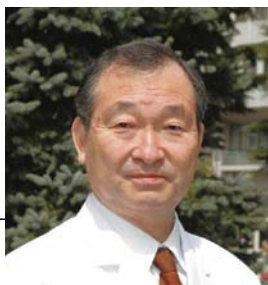
震災復興祈念号

Surgeon's Club

東北大学病院 肝胆膵外科・胃腸外科

〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1 医局/TEL:022-717-7205 FAX:022-717-7209 URL/http://www.surg1.med.tohoku.ac.jp/

東日本大震災により被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。
東北大学病院肝胆膵外科・胃腸外科は震災後の医療に積極的に参加していきます。



東日本大震災から一丸となった 復興への取り組みを

生体調節外科学分野（胃腸外科）教授 **佐々木 巖**

3月11日に発生した東日本大震災では多くの方が地震や津波のために未曾有の被害に遭われました。腹だたいし事に、それに続く東京電力福島原発事故の被害は地震発生から1か月を過ぎても継続し終息の見通しもたっていません。大震災では、特に巨大津波により第一外科関係者の中にも診療所やご自宅が流されて、甚大な被害に遭われた先生が大勢おられます。伊勢院長がおられる石巻市立病院は壊滅的な被害に遭い、今も全ての病院機能が停止しています。丙辰会会員では、石巻市立雄勝病院院長の狩野研次郎先生（昭和49年卒）が勤務中に津波にさらわれご逝去されました。謹んで狩野研次郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。また、甚大な被害に遭われた住民の方々や第一外科関係者の皆様に心からお見舞い申し上げます。

医局も実験室などを中心に教室は甚大な被害がありましたが、幸い、医局員と其の家族は奇跡的に無事でした。医局内部は実験室や研究室・事務センターなどがメチャメチャになり、地震発生当時は踏み入れる事も出来ませんでした。病棟に臨時医局を設置し、急性期を乗り越えた後で8階の医局に戻り、今は復旧作業中であります。この間、医局員も東北大学病院全体も、各人が互いに立場を尊重し、工夫を出し合い協力し合って危機管理を行ったことは感動的でもあり誇りに思うところです。また、大学以外でも、東北の各地でこのような様子が多く見られたと思います。

1000年に一度という大災害に遭遇し、大きなダメージを受けましたが、今後はこれを乗り越える事が何よりも大切なことです。テレビのインタビューに答えている子供達のしっかりした姿には、彼らが災害を乗り越えて明日の日本を創ってゆく期待を感じます。今後の復旧には相当な努力と時間を要すると考えられますが、医局および関連病院など、同門会が一丸となって知恵を出し合い、助け合って復旧・復興に向けて全力で取り組みたいと思います。

この度は、第一外科が一丸となって震災に関わる様々な問題に取り組んでいた様子をお伝えするとともに、関連病院の先生と互いに協力して復興に向けて共に頑張り、努力していく決意であることをメッセージとして伝えるべく特別号を発行することにいたしました。



がんばろう東北

東日本大震災からの復興を願って

消化器外科学分野（肝胆膵外科）教授 **海野 倫明**

2011年3月11日、この日を前後してすべてが変わった。当日熊本での研究会に出席していた私と片寄准教授は仙台で大地震との報道を聞き、電話などの連絡網が全く通じない中、熊本空港に急いだ。予約していた大阪経由仙台空港行は欠航、変更しようとした羽田行も欠航、ということで途方

に暮れたが名古屋行がすぐに飛び、との情報を得て乗り込んだ。名古屋に着き新幹線に乗ろうとするが東海道新幹線も止まりセントレア近くに一泊した。そのホテルでテレビをつけた。仙台空港に大津波が押し寄せ、大火事で気仙沼、石巻の夜空を焦がしている様子は、一生忘れることが出来ないであろう。興奮と不安のあまり一睡もできず、翌朝セントレアでレンタカーを借り仙台へ向かった。片寄准教授と交代で運転し、名古屋から中央高速、長野自動車道を通して新潟に入り、そこから小国峠を超えて仙台へ、計11時間の運転であったがアドレナリンが放出されているためか、あっという間であった。

仙台到着は深夜であったが、すぐに病院の災害対策本部に駆けつけた。そこでは里見病院長の指揮のもと多くの科長・医局長がさまざまな業務に当たっていた。医局からは肝胆膵外科江川准教授が、震災当日より帰宅せずに救急部バックアップ体制作りと医師の割り振りを担当し、獅子奮迅の働きを見せていた。3月13日から江川准教授の業務を引き継ぐ形で海野が災害対策本部に入り、主に救急部バックアップ、医師派遣業務、および月曜日から大勢が来院するであろう外来業務の対応を行った。まず最も被害が甚大である石巻と気仙沼に大学病院医師を送り込むために、大学が所有しているマイクロバスを借り上げ、石巻行、気仙沼行の定時運行バスとして、連日20名近くの医師を送り込んだ。また医師・看護師・薬剤師からなる避難所救護班を作りこれもバスで石巻に送り込んだ。3月14日月曜日から外来は、緊急のみとマスコミを通して報道したが、予想通り多数の外来患者が来院した。外来1階フロアーに、内科・外科・精神科・産婦人科・眼科・その他診療科からなる相談窓口を設営し、震災のため急患しか診察できないこと、検査・レントゲンは出来ず薬は1週間しか処方できないこと、新患入院はできないこと、など来院者への説明を行った。交通網が寸断されたためか、予定よりも少ない来院者であったため、大きな混乱は見られなかった。手術室の被害は少なかったが滅菌機器の被害により手術は臨時のみとなったが、約2週間ではほぼ元通りになった。

まさに未曾有の大震災であるが、東北大学病院はマスコミを賑わすことなく黒子に徹していた。今、振り返ってみると大学病院として良く危機管理されていたように思う。これはひとえに病院首脳部の強いリーダーシップによるものが大きい。まず職員に「大学病院は一致団結しこの危機を乗り越える」と宣言して皆を鼓舞し、失敗を恐れずどんどん新しい手を打った。特に「被災地からの患者は断ることなく全部受ける」というメッセージのもと、すべての病棟が文句を言わず粛々と働いた。うまくいかない事象もあったが、病院長が「俺に免じて許してくれ」、と頭を下げることにより皆が納得し次に進んでいった。この姿勢は雲隠れして陣頭指揮をとらず、部下を怒鳴りつけ、無節操に組織作りのみを行い、自らの責任を全く取らず言い訳しか言わない、どこかの大臣とは大違いである。また東北大学病院は人材豊富であることも実感できた。日頃お付き合いのない科の医局長や若手がどんどん積極的に動いているさまは、まさに東北大学の将来は明るい、と感じられるものであった。今回の大震災を通して東北大学病院の結束が一層強まったと思う。

現医局員とその家族には、不幸中の幸いで人的被害はなかったが、当科OBである石巻市立雄勝病院院長、狩野研次郎先生が病院勤務中に被災されお亡くなりになった。丙辰会として雄勝病院を永年支えてくれた狩野先生に、謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りする。また多くの医師が診療所や自宅、車などの物的被害を被り、また精神的損害を受けたものと思う。甚大な被害にあった石巻市立病院の医師には、いち早く「医局は皆さんの外科医としてのキャリアを生涯にわたりtake careします」というメッセージを送った。今後も医局として被災された医師を物心両面で支えて行く所存である。

この東日本大震災により日本は第2次世界大戦以来という国難を迎えている。震災被害のみならず、福島原発問題、電力不足と、それら要因による不景気など、今後も多くの試練が待ち受けている。あわせて、デマや風評被害などの人災も今後増えてくるように思う。すでに東北地方の大学や研修病院は、来年不人気になることが予想されている。科学者である医師がこのような非科学的なデマや風評を広めることが無いよう厳命したい。また、石原慎太郎氏が「我欲を捨てなければならぬ」と主張し都知事選に勝利したのが印象的であるが、まさに「我欲を捨てる」その時期である。医療のおいても然りである。無駄なものを削り、必要なもののみ構成され、研ぎ澄まされた機能美すら感じられる日本刀のような、切れ味鋭い外科医局を、東北大学を、日本を、創ってこの国難を乗り切っていきたいと強く思う。東北人は口下手であるが忍耐力があり底力がある、これを全国に示したい。若い力、年輩の力を結束し「がんばろう東北」、これを合言葉として医局の復興を目指すためにも、外科学を志す諸兄の応援をお願いしたい。





東日本大震災発災後の 当科の対応

(平成23年4月5日現在)

肝胆膵外科・胃腸外科 医局長
内藤 剛

3月11日 午後2:46地震発生。
東北大学病院災害対策本部立ち上げ。

1. 臨時医局の開設・移動

発災後医学部2号館8階の医局は書棚等が倒壊し業務遂行、安全確保が困難であったため、東8階病棟SGT室を臨時医局とした。

2. 医局員・事務員・同門会員の被災状況と安否確認 (平成23年4月5日現在)

医局員においては全員無事に避難し、怪我人等の連絡はなし。事務センター秘書らは倒壊した本棚で廊下が塞がり締め出されたが、窓から脱出し無事に避難することができた。

旧第一外科同門会(丙辰会)会員では、石巻市立雄勝病院長 狩野研次郎先生が、病院勤務中に被災にあわれ残念ながらお亡くなりになられた。丙辰会として雄勝病院を永年支えてくれた狩野先生に、謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。また、多くの丙辰会会員が診療所や自宅などに被災を受けられたとのこと連絡をいただいている。

3. 東北大学病院災害対策本部

発災時より東北大学病院災害対策本部が設置され、肝胆膵外科江川新一准教授が、患者割振・医師派遣業務に当たり、3月13日に帰仙した海野倫明教授がその後の業務を引き継ぎ、被災地への医師派遣業務を担当した。災害対策本部会議には力山敏樹前医局長・内藤剛新医局長が常時参加した。

4. 関連病院被災状況確認 (平成23年4月5日現在)

- 石巻市立病院 津波により被災、病院機能停止。再開の見通したたず。
- 石巻市立雄勝病院 津波により被災、病院機能停止。再開の見通したたず。
- 東北厚生年金病院 地震により構造柱の一本が損傷したが鉄骨が無事であったため復旧可能。現在修復工事中。
- 仙塩総合病院 津波により被災、病院機能停止。現在復旧作業中。
- 仙台医療センター 地震により院内配管損傷し病床一部縮小。現在は復旧。

5. 東北大学救命救急センターへの医師派遣

発災翌日の3月12日より当院救急部からの要請を受け、救急外来トリアージの緑・黄色担当チームとして医局員を派遣。8時間ごとのシフトを組み日中および準夜勤務は2名ないし3人、深夜勤務は2名体制で支援。3月20日までの9日間のべ47名の医師を派遣した。

6. 他病院・避難所救護班への医師派遣

みやぎ県南中核病院は発災後急増した救急外来患者さんへの対応を常勤医師で行っていたが、対応しきれなくなってきたとのことで3月15日に応援要請あり。翌3月16日より24時間交代、1名ないし2名で4月3日まで応援医師を派遣した。のべ人数は29名であった。ガンリン事情が悪く大学病院災害支援車両での送迎を要した。避難所の救護班は東北大学病院として医師・看護師・薬剤師らで

チームを組んで主に石巻、気仙沼、市内若林区に派遣していたが、当科では3月16日より3月20日まで石巻地区、3月17日には若林区にそれぞれ7名、4名を派遣した。
4月3日までのべ派遣医師数は87名であった。

7. 被災地域からの患者受け入れ

発災後石巻地区、気仙沼地区で救急患者の急増に伴い、石巻赤十字病院、気仙沼市立病院から当院に多数の患者受け入れ要請があり、各診療科で受け入れを行った。また東北厚生年金病院では地震に伴い病院建物の損壊が激しく病棟を閉鎖せざるを得なかったため、入院患者の搬送要請があり、これも受け入れを行った。各地域からの搬入患者数は以下の通り。

- 東北厚生年金病院／10名 ●石巻赤十字病院／10名
 - 気仙沼市立病院／9名 ●その他の地域／3名
- 合計32名



写真は3月17日の石巻大街道周辺の様子

8. 発災後手術対応

発災後手術室のある中央診療棟の配管が損傷し手術室の機能が一時的に麻痺したため、3月21日までは緊急手術のみの対応となった。3月22日以降は通常手術も少ないながら再開され、4月4日以降は通常時の90%程度の件数をこなせるようになった。
発災後4月3日までに施行した手術症例数は、胃腸外科18件、肝胆膵外科9件の計27件であった。そのうち緊急手術例は胃腸外科11件、肝胆膵外科は2件であった。胃腸外科の緊急手術例のうち、1例は発災直後の3月11日夜に施行した外傷性小腸穿孔症例であり、発災後早期の3月14日から18日までに7例の緊急手術を施行した。肝胆膵外科は緊急手術例の2例は3月22日以降であったが、通常手術が再開された3月22日から4月3日までに拡大肝右葉切除術1例、膵頭十二指腸切除術2例を施行した。日本肝胆膵外科学会愛の手プロジェクトに4月1日から参加し肝胆膵高難度外科手術の受け入れ可能を表明した。

9. 医局復旧作業

3月14日午後より医学部2号館の立ち入りが可能となり、3月15日より医局内の整理を開始している。倒壊した棚などで部屋の入口や通路が塞がれていたが、医局員の総力をあげて元に戻し、3月18日までに各部屋間の移動が自由にできるようになった。4月5日より医局行事を元の集会所で再開している。余震は頻回であるが、今のところ復旧作業中の事故はなく、安全に行っている。多くの医局機能が復旧したものの、実験室(病理室、培養室を含む)は機器類の破損が特に甚大で、医局内での実験再開のめどは立っていない。



写真は震災後の医局内の様子

10. がん患者受け入れ

被災地域での抗癌剤治療を中断した患者を対象に、主に石巻地区から4月5日現在約13名のがん患者の紹介を受け、今後の治療を当院が中心となって継続することとした。

病棟における震災への対応

胃腸外科 助教 渡辺 和宏

東日本大地震により被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。

当教室の病棟における震災時の対応について報告いたします。

震災直後に、病棟にいた医師・看護師が中心となり、肝胆膵外科・胃腸外科に入院中であった患者全員の無事・安全を確認した。震災当日は胃腸外科の定期手術日であったが、手術終了後であり幸いにして術中の被災はなかった。外傷患者が搬送され、震災当日の夜に胃腸外科で緊急手術が行われた。東8階病棟に臨時医局を設置し、1日2回のミーティングで、東北大学病院災害対策本部からの最新の情報を共有し、統制のとれた診療体制をとることができた。夜間は、救急外来トリアージに当科の大学院生が2名派遣されたほか、胃腸外科2名・肝胆膵外科2名の医師が病棟に常駐し、複数の急患にも十分対応できる体制がとられた。手術器具のガス滅菌が難しい状況であったが、麻酔科・手術部の協力もあり、震災から1週間の間に、8件の緊急手術が当科で施行された。石巻地区、気仙沼地区などから、32名の患者が肝胆膵外科・胃腸外科に入院となった（4月5日現在）。肝胆膵外科・胃腸外科の東8階、東13階病棟の病床のみでは対応不可能であり、複数の病棟からベッドを融通していただき、診療にあたることができている。現在は、外来や手術の体制もほぼ通常通りに復旧してきている。災害急性期に直接の被災地で活動できなかったことのもどかしさはあるものの、東北大学病院は周辺地域における医療の最後の砦である、という意識で、余震の続く中、いつ何時でも周囲からの要請に応えられるように心がけております。

アメリカにおける被災地支援活動

東北大学大学院 生体調節外科学分野 唐澤 秀明（アメリカ国立衛生研究所 留学中）



タイダルベイスンの桜とワシントンモニュメント

この度の未曾有の大震災につきまして、心よりお見舞い申し上げます。現在私はワシントンDC近郊のアメリカ国立衛生研究所（NIH）に留学しており、日本とは14時間の時差があるため、3月11日朝に東日本大震災の発生を知りました。こちらのテレビ局では震災直後より特別番組が組まれ、またインターネットでも被災地の情報・映像が多数配信され、あまりの惨状にみな言葉を失っていましたが、研究室の同僚・友人からはすぐに温かいお見舞いの言葉をもらい、コンビニの店員さん達も、私が日本人とみると「日本は大丈夫か」、「家族は無事なの」と日本を心配して声をかけてくれました。アメリカ赤十字・企業・著名人・在米日本人等による日本支援企画も迅速に立ち上がり、多額の義捐金が寄せられております。なかでもアメリカらしいものと言えば、様々なチェリーグッズの販売でしょうか。私もレディーガガのプレスレットとラルフローレンのポロシャツを購入することで、僅かながら協力させて頂きました。また日米友好の象徴として毎年4月上旬にワシントンDCで開催されているさくら祭りでは、美しい桜が人々を魅了するとともに、活発な日本支援活動が行われました。NIHにおきましても、日本人研究者を中心にNJSA（<http://www.nihjsa.org/>）というグループが立ち上がり、被災地の研究を支援しようという動きがございます。私達でお役に立てることがあれば、ぜひご連絡下さい。大学に入学してから渡米するまで、10年以上過ごした東北地方が被災し、非常に心を痛めていますが、必ずや復興出来ると信じています。まだまだご苦労が尽きないと思いますが、遠くアメリカの地から応援しております。

編集・発行

東北大学病院 肝胆膵外科・胃腸外科

医学系研究科 外科病態学講座 消化器外科学分野・生体調節外科学分野

〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1

肝胆膵外科・胃腸外科外来／TEL:022-717-7740 病棟:東8階病棟／022-717-7626 東13階病棟／022-717-7591

医局／TEL:022-717-7205 FAX:022-717-7209 ホームページアドレス／<http://www.surg1.med.tohoku.ac.jp/>